viva! 耕作穂浮季地～耕作放棄されない地～

竹田　有希[1]・上原　一輝[2]・木﨑　凜太朗[3]・深堀　達也[4]

[1)2)3)4)]熊本大学 交通政策分析研究室

近年，我が国の農業は農業就業者の高齢化や農業就業人口の減少，耕作放棄地の増加などの問題が発生しており，熊本県も例外でない．そこで，私たちは耕作放棄地の利活用を提案する．タイトルの「耕作穂浮季地」にある「穂」，「浮」，「季」の3字は，それぞれ稲穂，気球，四季をイメージしている．具体的には，「穂」として田んぼアートを作成するイベントを開催し，「浮」として気球を飛ばし上空から田んぼアートを楽しんでもらう．また，「季」として季節にあった花や作物を栽培する．これによって，耕作放棄地の利活用と同時に，様々な世代間での交流を図る．また，田んぼアートや気球のイベントによって観光客の増加が見込まれる．さらに，熊本県ではすでにいくつかの地域で田んぼアートを行っているので，それらと連携して，熊本県全体の元気を創りたい．

1．政策提言の背景

我が国の農業は，農業就業者の高齢化や，農業就業人口の減少により，様々な問題に直面している．その問題の一つとして，耕作放棄地の増加がある．耕作放棄地とは，定義として，過去一年以上の間，作物の栽培が行われておらず，今後も耕作に使われない農地の状態のことである[1)]．耕作放棄地の問題点として，雑草や害虫の増加，食糧自給率への影響，ゴミの不法投棄，農地の集積化の遅れ，農地の持つ多面的機能の喪失，土地としての実質的な価値の低下などが挙げられ，放棄された土地だけではなく，周辺の土地にも影響が及んでしまうことが考えられる．耕作放棄地の増加による影響は非常に大きいため，見過ごすことのできない問題となっている．

耕作放棄地の問題は，熊本県でも問題となっている．農林水産省の「農林業センサス」[2)]によると，熊本県の耕作放棄地面積の増加幅は近年縮小しているものの，耕作放棄地面積は増加し続けている(図1)．また，同統計で，耕作放棄地の増加の原因とも考えられる，農業就業者平均年齢の増加・農業就業人口の減少も確認できる(図2)．このような現状から熊本県は，経費のかかる耕作放棄地の再生作業を支援し，耕作放棄地の解消を図る，耕作放棄地解消事業（耕作放棄地有効利用促進事業）[3)]など，様々な取り組みを行っている．

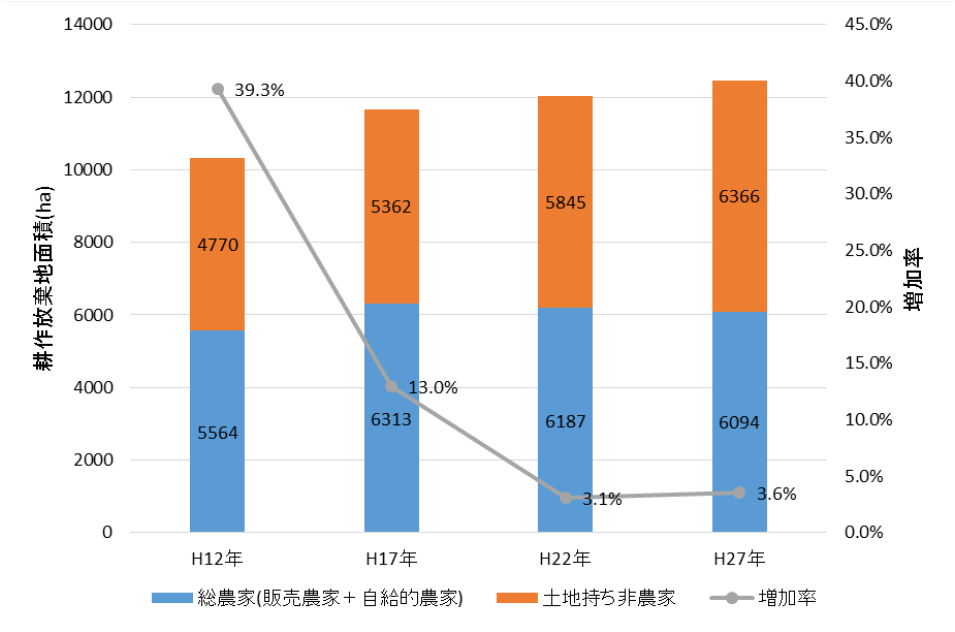

図-1 熊本県の耕作放棄地面積と増加率の推移

（資料）農林水産省「農林業センサス」

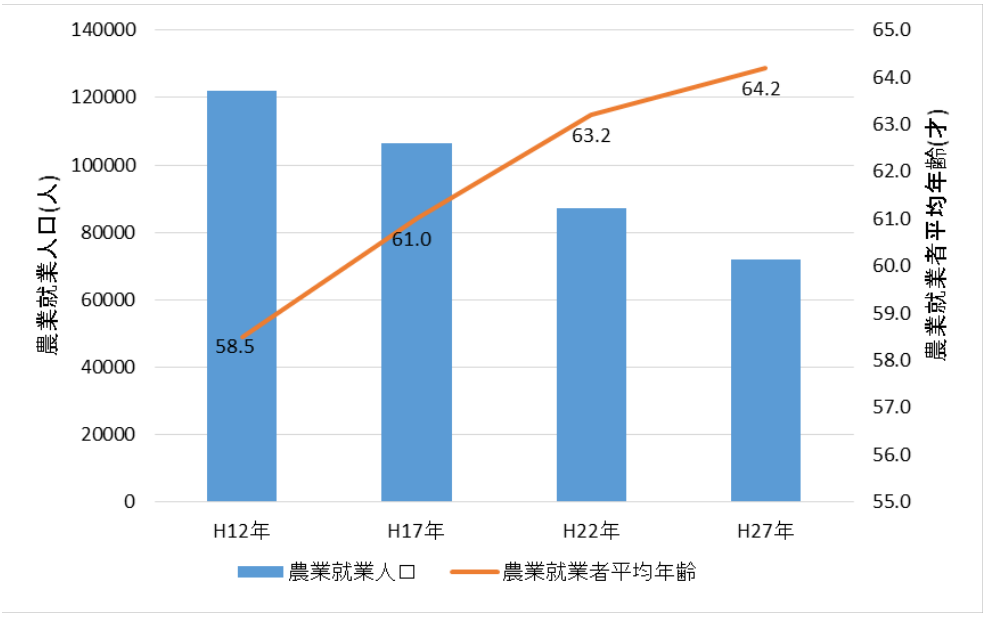

図-2 熊本県の農業就業人口と平均年齢の推移

（資料）農林水産省「農林業センサス」

2. 政策提案によって解決したい課題

- 耕作放棄地の増加
- 農業就業人口の減少・高齢化

上記の課題を解決するために私たちは今回，耕作放棄地を活用したイベントを開催することを，耕作放棄地の利活用案として提案する．詳細は4章でも述べるが，タイトルの「耕作穂浮季地」にある「穂」，「浮」，「季」の3つをイメージした提案を考えた．「穂」として田んぼアートを作成するイベントを開催し，「浮」として気球を飛ばし，上空から田んぼアートを楽しんでもらう．また，「季」として季節にあった花や作物を栽培する．

3. 田んぼアートの取り組み事例

(1) 青森県田舎館村における田んぼアートの取組み事例

田舎館村は弥生時代から続く稲作の盛んな地域で，田んぼアートを平成5年から開催しており，田んぼアート発祥の地である．シャトルワゴン車の運行拠点となる田んぼアート駅の設置や，村役場・道の駅が展望室として開放されるなど，村全体で田んぼアートを盛り上げている．一方で，年間32万人を越えるほど来場者が多いにもかかわらず，観光収入にはつながりにくいことが課題として挙げられている．その原因は，村内に宿泊施設や飲食できる場所がないことや，お土産品がないことである[4)]．現在は，NPO法人や田舎館村などが地元団体の「田園」未来を築く会に対し，イベントの企画や特産品の開発・販売，民泊の仕組みづくりなど，田んぼアートを生かした地域ビジネス創出を支援する事業を行っている[5)]．

この事例であるように，田んぼアートにはかなりの集客効果が見込まれる点で有効な手段である．また，この事例と比較して私たちの提案では，県内にある応急仮設住宅を民泊施設として再利用することでコストを抑えられ，すぐに活用できる点でメリットがあると考える．

図-3 田舎館村の田んぼアート[6)]

（2） 熊本県内における田んぼアートの取組み事例

a） 上天草市松島町教良木山浦地区

上天草市松島町教良木山浦地区では2015年から地域おこしのため田んぼアートが行われており，天草四郎観光協会や地元の地域おこし団体，上天草高校の生徒と共に作成している．絵柄がよく見えるようにと物見やぐらも設置している[7)]．

b） 玉名市

玉名市では2013年から田んぼアートを行っており，九州新幹線新玉名駅の下り線ホームからは絵を一望できる．この田んぼアートは北稜高校や地元観光協会でつくる実行委員会が手掛けており，田植えの際には地域住民も参加している[8)]．

県内にこれらの事例があることから，私たちの提案では田んぼアートツーリズム通じて，県内のつながりと観光客の増加が見込めると考える．

4．課題解決策の具体的な手法

タイトルにある耕作穂浮季地の「穂」，「浮」，「季」の3つの提案を以下で説明する．

まず，「穂」は，稲穂の穂を表している．具体的には耕作放棄地を田んぼアートとして利活用する． 田んぼアートは県外の事例でもあるように集客効果等が見込まれている．また県内にも現在田んぼアートを行っている地域が存在するため，それらの地域と連携し，「田んぼアートツーリズム」と名付けて，熊本県全体の一イベントとして開催する．

次に，「浮」は，気球が浮く様子を表している．具体的には，気球に乗って，上記の田んぼアートや下記の花畑を上空から眺められるイベントを開催する．また，気球からは，自分の住んでいる地域を上空から眺めることにもなるので，観光客だけでなく，地元住民も楽しめるイベントになる．

最後に，「季」は，四季を表している．具体的には，季節を感じられる花々を植え，大きな花畑をつくる．その花畑は気球からだけでなく，地上からも楽しめる．地域住民だけでなく，県外からの観光客にも訪れてほしい．

すべてのイベントは，はじめは私たち大学生と熊本県で運営し，徐々に地元の農家を中心とした住民に主体を移していく．

また，田んぼアートやイベントの周辺に宿泊施設や飲食店がない場合，観光収入が減少していまう可能性がある．そこで，県内の今後撤去される予定の応急仮設住宅を民泊施設として，再利用する．

5. 課題解決策の特徴，重要性，有効性

以上の提案により，次のことが考えられる．

1 つ目は，田んぼアートを作成することで耕作放棄地を有効に活用することができる．また，田んぼアートをきっかけにそれまで農業に興味がなかった人や関わる機会がなかった人に農業について知ってもらう機会となる．それによって農家になるために熊本県に移住してくる人が増える可能性もあり，そうなればさらに耕作放棄地の解消が進む．

2 つ目は，田んぼアートや気球のイベントを通して観光客増加が見込まれる．熊本地震で一時的に減少してしまった観光客数だが，魅力的なイベントの実施より熊本地震以前を超える観光客数が期待できる．さらに，熊本県内の複数の地域で同様のイベントを開催し，それらを連携させることによって，　一地域にとどまらず県全体での取り組みとなる．既に行われている熊本県内のイベントと連携することも，有効な手段である．

また，応急仮設住宅を再利用することで，コストを抑えることができる．宿泊施設があることで，観光収入も期待できる．応急仮設住宅を再利用することで，撤去する費用を削られる．

その他に，イベントが様々な世代間での交流を盛んにする．例えば，田んぼアートを作成するイベントであれば農家の方々や地元の子供たち，近隣に住む大学生が交流する機会となり得る．交流の機会となれば，新しいコミュニティーの形成につながる．

参考文献

1) 農林水産省　耕作放棄地の現状について
2) 農林水産省 HP 農林業センサス報告書 第 1 巻 都道府県別統計書(全 47 冊)
3) 熊本県 HP 耕作放棄地対策
4) 田舎館村 まち・ひと・しごと創生総合戦略
5) 国土交通省　田舎館村地域づくり活動支援協議会　成果報告書
6) 田舎館村 HP　田んぼアート水田風景
7) 天草四郎観光協会 HP
8) 熊本県北部観光 WEB サイト　たまララ